

《遺跡紹介》

サルディニア内陸部のローマ遺跡

— フォルドンジアヌスから見るローマ帝国の属州統治 —

桑 山 由 文

1 ローマ帝国とサルディニア島

サルディニア島がローマの支配下に入ったのは、第1次ポエニ戦争終結の直後であった。それまで、この島ではフェニキア人が南部を中心に植民市群を建設し、カルタゴが支配下に置いていた。だが、第1次ポエニ戦争の戦後処理をめぐって生じた傭兵戦争において、島駐屯の傭兵部隊がカルタゴ本国に反発して共和政ローマに援助を要請したのに乗じ、ローマが島全体を支配下に置き、属州サルディニアとした¹⁾。

以降、この島は共和政期の間、ローマへの穀物供給地として重要な位置を占めるようになった²⁾。キケロはシチリア、アフリカとともにこの島をローマの穀物供給の三本柱と述べる³⁾。それゆえ、前1世紀の元老院議員間の権力闘争では、この地を押さえることには戦略的に大きな意義があり、たとえばカエサルとポンペイウス、オクタウィアヌスとセクストゥス・ポンペイウスはこの島の支配権をめぐって争った⁴⁾。この間、ローマによる支配に対して、島の住民の強い反発も生じた。とくに前2世紀後半までは大規模な対ローマ反乱が続き、ローマ元老院議員たちは恒常的対応を余儀なくされたが、平定は容易ではなかった⁵⁾。

帝政期に入ると、事情は徐々に変わっていく。サルディニアは、オクタウィアヌス（アウグストゥス）がローマ政界の頂点に立ち、属州統治権限を手に入れた当初、元老院属州とされた。その後、後6年には皇帝属州とされ、それなりの兵力が駐屯したものの、ティベリウス帝期以降、補助軍のコホルスが4個か5個駐屯したにすぎなくなった。1世紀末から2世紀にかけて、その数はさらに1個か2個に減少した⁶⁾。そこで、帝政期のサルディニアは、いわば「落ち着いた」属州となったと考えられ、ローマ史研究者も大きな関心を示していない⁷⁾。

サルディニア島中西部に位置するフォルドンジアヌスは、現在1000人ほどの人口の町だが、その都市としての起源は、帝政前期初めに形成された集落にある。古代の集落中心部は、現在も住宅地であるため、ローマ時代の詳細な状況は分かっておらず、遺跡は町に点在している（写真1）。本稿では、このフォルドンジアヌスに残る遺構を紹介し、ローマによるサルディニア支配の実状を探ることで、帝政期ローマの属州統治のあり方を考える一助とする。



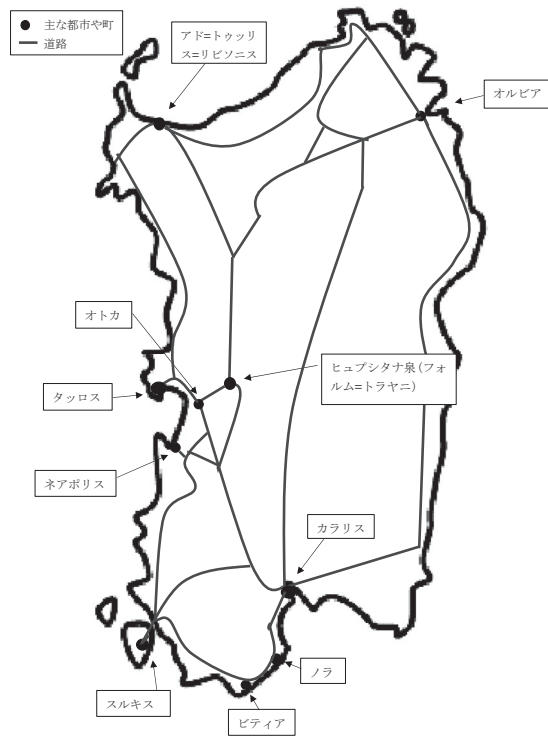
(写真1) フォルドンジアヌス遠景 (手前が公共浴場の遺構。奥が現在の市街地)

2 フォルドンジアヌスのローマ遺跡

サルディニア島は、西部や南部の沿岸には肥沃な平原が広がっているが、内陸部は標高が高く、岩場の多い地形で、とくに島の東半分は険しい山岳地帯である。現在のフォルドンジアヌスは、サルディニア最大の河川であるティルソ川（古代名はテュルスス）流域にある⁸⁾。西方には肥沃なオリスタノ平原が、ローマ期にはタッロスやネアポリスなどの都市が繁栄した沿岸部まで達している一方、東方は広く高原地帯であり、平野部と高原地帯の境界に位置する（図⁹⁾）。

南には、前2世紀に建設され、アウグストゥス帝期にコロニアとなった可能性のあるウセリスが存在していたらしいが、遺構がほとんど見つかっておらず、わずかの関連碑文から都市行政組織の存在などが推定されるだけである¹⁰⁾。P. Meloni は、このウセリスの公職者によって、アウグストゥス帝期にフォルドンジアヌスに集落（pagus）が建設されたと推測し、この説がほぼ受け入れられているようである¹¹⁾。

建設当初の名はヒュプシタナ泉（Aquae Hypsitanae）であった¹²⁾。その名の通り、現在も付近の山地を源とする60度の湯が沸きだしており、同じく山地から発する冷水と混ざる仕組みとなっている（写真2）。周辺に居住する、サルディニア先住民ヌラーギの一派がヒュプシタニ人と呼ばれており、古くから彼らの水の聖域が存在したと推測されている¹³⁾。ローマ人はこの天然温泉を利用した公共浴場を建設し、さらに先住民同様、この聖域を崇拜対象とした（写真3、4）。写真4は浴場の中核部分の、天然の湯が満たされた大浴槽（natatio）



(図) 属州サルディニア



(写真2) 現在も湧き出す熱水



(写真3) 温水池

(13x6.5x1.5m) とポルティコである。現在は露天であるが、本来は天井で覆われていた。最も良い状態で遺構が保存されている箇所でもある。周辺からはローマ人が川のニンフやアスクレピオス神に治癒を願って捧げた碑文がいくつも発見されており¹⁴⁾、湯治の場として人気を博していたことが分かる。



(写真4) 大浴槽 (natatio) とポルティコ

ヒュブシタナ泉には軍事拠点としての役割も与えられていた。建設初期から、ローマ補助軍のコルシカ人第1コホルスが駐屯していたのである¹⁵⁾。それだけではない。遅くともクラウディウス帝期には、北部沿岸のアド＝トゥッリス＝リビソニス（以下、トゥッリスと略す）市から南下する道路と、南部沿岸の州都カラリスから中部のオトカ方面に延びる道路とがヒュブシタナ泉を介して結びつけられた（図）¹⁶⁾。写真5のように、ティルソ川渡河点として、8つのアーチを持つ橋も建設された¹⁷⁾。この地は島の南北縦断道路の結节点的役割を果たすこととなり¹⁸⁾、陸上交通の要所と位置付けられたのである（写真6、7）。加えて、ティルソ川沿いにはさまざまな交易地も存在したらしく、ヒュブシタナ泉はそれらからの物資の集積地であり、河口部の諸都市とつながる水上交易の拠点でもあった可能性が指摘されている¹⁹⁾。



（写真5）ティルソ川とローマ時代の橋



（写真6）ローマ時代の道路

以上のようにめぐまれた立地の下、2世紀初頭のトラヤヌス帝期にはこの町はフォルム＝トラヤニ（Forum Traiani）、すなわち「トラヤヌスのフォルム」と名前が変えられ、さらなる整備が進んだ。「フォルム」という名称から、当時、周辺農耕民と山地の牧畜民とがこの地で生活必需品を交換するという、市場としての機能が強まり、同時に、両者の文化的交流も盛んであったと



（写真7）橋上から北方を望む

考えられている²⁰⁾。実はこの地では、すでにユリウス＝クラウディウス朝期から、「すべての civitates barbariae」が属州総督らしき人物と連名で、皇帝に対する奉獻を行っていることが分かっている²¹⁾。civitates barbariae は直訳すれば「未開の地の町々」とでもなるだろうが、碑文からは詳細は分らず、島内陸部の山地民を意味するのではないかと考えられている。町の名称変更は、そうした人々との交流が2世紀により盛んになったことを示すとされる。

湯治場としての機能も増強されていった。前述の「天然温泉」部分を基に、南方の小高く

なっている、粗面岩の岩床部にまで浴場の増設が始まり、床面積も約 1.5 倍となった。この増築部には、ローマ帝国の他の地域にみられるような、フリギダリウム（冷水浴室）、テピダリウム（微温浴室）、カリダリウム（温水浴室）などの施設も整えられていった。

より南には新市街も形成された。浴場に南面して広場があり、そこから市街地が広がっていたらしい。本稿冒頭で述べた通り、その



(写真 8) 闘技場址

ほとんどは現在の市街地の下に埋もれており、詳細は不明であるが、さらに南には、闘技場の遺構も存在している（写真 8。現在もほとんど整備はされていない）。

セウエルス朝期にはキウィタス＝フォリトラヤネンシウム（*civitas Foritraianensium*）の名となり、総督の快癒をニンフに願う奉納碑文などから、相変わらず湯治の盛んであったこと、統治拠点としての重要性も増したことが分かる²²⁾。前述の浴場増築も完成はこの頃に位置づけられる。ディオクレティアヌス帝期にはムニキピウムに昇格された可能性があり、さらに、ビザンツ期にはクリュソポリスと名を変え、島の軍事行政の中心地ともなった²³⁾。

以上のように、この町は、アウグストゥス帝期に建設されて以来、順調に規模を拡大していった。こうした過程は、ローマによるサルディニア統治のあり方とどう関係しているのか。この点について、次では、まずローマ帝政前期のサルディニアの様子を概観した上で、検討していく。

3 ローマ帝政期サルディニアのかたち：豊かさと厳しさ

第 2 章冒頭で述べた地理的特質のため、ローマ帝政期サルディニアにおける人々の生活様式は、平地と高地とでははっきりしたコントラストをなしていた。古くから都市化が進んでいたのは、共和政期以来の州都カラリス（現在のカリアリ）を中心に、ノラ、ビティア、スルキスなどの諸都市が存在する島南部の沿岸地域であった。これらは、もともとはフェニキア人が建設した植民市群であり、帝政期に入ってから地中海東西交易によって繁栄し続け、フェニキア文化の要素を色濃く残していた²⁴⁾。カルタゴ支配期からの延長線上にある地域であった。

遅れてローマ共和政期から都市が発展してきたのが、島北部の沿岸地域である。こちらは首都ローマとの地理的な近さが繁栄の理由である。代表的な都市は北東のオルビアと北西のトゥッリスである²⁵⁾。オルビアの都市の格は不明だが、トゥッリスはカエサル期にコロニアとなった。どちらも首都ローマの外港オスティアと密接に結びついている、イタリアとの交通の要であり、穀物の積み出し港として重要な位置を占めていた。トゥッリスはオスティア

に船主組合の事務所が置かれていたことが知られる。周辺では共和政期からローマ人による大土地所有が発展し、帝政期には、ウェスタの大巫女や、ネロ帝の恋人アクテをはじめとする皇帝家解放奴隷が広い所領を持っていた²⁶⁾。

その一方、島の内陸部の高原地帯では、フェニキア人の到来前から、先住民ヌラーギ人が、石を積み上げた独特の円形住居を用いて、多数の集落を営んでいた²⁷⁾。ローマ帝政期に入っても状況はほとんど変わらず、この地の都市化は進んでいなかった。共和政期から帝政期にかけて、サルディニアの地理について述べたディオドロスやストラボン、パウサニ阿斯は一致して、内陸部の高原・山岳地帯では、豊かな平野部とは異なって、牧畜生活を送る野蛮な山地民が、カルタゴやローマの介入を跳ね返して半独立状態にあり続け、平地民を脅かしていたと記す²⁸⁾。

このような沿岸の平野と内陸の高地との大きな違いに絡めて諸史料は、とくに内陸部の気候が厳しく、健康に害をなすことに必ずといってよいほど言及する。ストラボンはこの地の夏が健康に悪いことを、プルタルコス は冬の寒さの厳しさを強調する。キケロも赴任している弟に健康に注意するよう促している。パウサニ阿斯はとくに具体的で、内陸部の山地の空氣の悪さや風の強さを指摘する²⁹⁾。

そこで、現代のローマ史研究者もしばしば、こうした史料を重視し、ローマ帝国政治中枢が、サルディニア内陸の山岳地帯は居住に適さず住民も不穏であると考えて、統治関心をほとんど持たず、いわば放置しておいたのだ、あるいは、支配を浸透させることができず、「ローマ化」も進展しなかったと見なす。たとえば帝国諸属州の状況を概観した M. Goodman は、サルディニアが属州バエティカのような、ローマ都市が多く建設された地域とは異なる統治を受けたことを強調し、その理由としてこれらの要素を指摘する。彼は、山地民による平地民への襲撃がさまざまな問題を引き起こしていたにもかかわらず、ローマ人は本腰を入れて対策を取らず、ほとんど興味も抱かなかったのだという。R. J. A. Wilson も、Goodman ほどではないにしても、同様に島の風土と悪評を指摘し、都市化が進まなかったことの背景にローマ人の関心の低さを主張する³⁰⁾。

しかし、こうした理解には問題が多いように思われる。第一に、前述した文献史料の認識がどれほど実態を反映していたのかは疑問である。たとえばキケロは、具体的な困難に言及するのではなく、漠然と不吉な印象を抱いているだけにみえる。帝政期に限定すると、サルディニアそのものへの関心が相対的に低下し、内陸部の実態がより正しく把握されなくなっていた可能性も高い。P. Erdkamp は、帝政期のサルディニアが、実際は首都ローマへの穀物供給に従来と変わらない役割を果たしていたにもかかわらず、エジプトやアフリカの陰にシチリアとともに埋没してしまい、文献史料での言及が激減していくことを指摘した³¹⁾。パウサニ阿斯は山地民の半独立状態を記すが、彼が、同時代のローマ帝国ではなく、過去のギリシア人やフェニキア人による植民の伝承に主眼を置いて語っていることを無視すべきではない。

サルディニアが不健康な地域という認識についても、R. J. Rowland, Jr. が墓碑銘などの研究から、実体のない、不当なものと結論付けた³²⁾。P. J. Brown は、Rowland Jr. の分析手法の限界を指摘しつつも、その主張そのものには賛成する³³⁾。こうした史料記述は、内陸部と平野部とで住人の生活様式が明瞭なコントラストを成しているという、古からのサルディニアの特徴を強調するための、たぶん誇張された表現だったのであり、帝政期の実情を考察するにあたり、単純に当てはめるべきではない。

第二に、ローマ側が、山地民の動向に大した関心を持たなかったとは考えにくい。第2章で見たように、ヒュプシタナ泉の、平地と高原地帯の境界という立地は、山地民の存在を意識していたからこそであろう。その後の、コホルス駐屯や名称の変更なども、ローマ中央からの強い働きかけなくしては起こり得なかったのである。Meloni、Zacca などは、やや強調しすぎるくらいがあるが、フォルム＝トラヤニの軍事的側面を重視する方が、説得力がある³⁴⁾。現在でも印象に残る公共浴場関連の遺跡に過度に引きずられて、この町の有した、信仰や治療以外の側面をなおざりにすべきではない。

とりわけ、ヒュプシタナ泉と道路網の建設とが一体で進められたことは、ローマ中央の、大掛かりな戦略的意図を示しており、注目に値する。ユリウス＝クラウディウス帝期以降、道路網は島全体に張り巡らされていった。島東部の沿岸部や東半分の山岳地帯も例外ではなかった(図参照)。ローマは大規模な軍事力展開ではなく、内陸部の高地を取り囲み、徐々に圧力を高めていこうとしたとみるべきではなからうか。ヒュプシタナ泉の建設とそのフォルム＝トラヤニへの発展という流れは、アウグストゥス帝期以来ローマが、沿岸から内陸へと徐々に支配を強めていっていた証拠といえる。前述した、すべての「未開の地の町々」からローマ皇帝への碑文の奉献場所がヒュプシタナ泉であることを考慮すると、この町が、ローマによる先住民行政の司令塔的役割を果たしていた可能性もある。

もちろん、サルディニアに駐屯する兵力がわずかの補助軍のみであったことは、ローマにとって、サルディニア内陸部の住人が常に脅威であり続けはしなかったことを意味している。ヒュプシタナ泉の1コホルスでは大規模軍事行動は不可能である。しかし、これは、ローマ中央にサルディニア全島支配を行う意志がなかったことと同義ではない。実際、タキトゥスによれば、ティベリウス帝期に、イシス教やユダヤ教への信仰ゆえに断罪された解放奴隷4000名が、サルディニアにおける山賊鎮圧のために派遣された³⁵⁾。ローマ中央がサルディニア内陸部の情勢に目を配り続けており、緊急時には対応していることは間違いないのである。ただ、その動きは通常は急を要するものではなかった。属州としての格は低いものの、基本的には皇帝属州として位置づけられつづけたことを軽視すべきではない³⁶⁾。

もっとも、そうした、山地民を取り囲む支配体制を構築していきつつも、ローマ人は、サルディニア内陸部に、北部のような大農場経営を拡大していきはしなかったようである。S. L. Dyson と R. J. Rowland, Jr. のフィールド・サーヴェイによれば、フォルドンジアヌスやウセリス周辺では、ローマ帝政期においてもヌラーギ人の集落がローマのウィッラ・システム

に置き換えられていかず、ローマ人的生活様式は広がらなかった³⁷⁾。前述の Wilson はこうした状況をローマの統治関心のなさゆえと考えるが、「ローマ化」の進展と支配の浸透とを安易に結びつけるべきではない。サルディニアにおけるローマの支配のあり方は、ローマの生活様式とは切り離して考える必要があるのである。そしてこのことは、単にサルディニアだけでなく、他のローマ属州にも敷衍できるように思われる。筆者は現在こうした見通しを抱いている。稿を改めて、さらに考察を深めてゆきたい。

註

- 1) C. Tronchetti, The Cities of Roman Sardinia, in M. S. Balmuth and Rowland, Jr., R. J. eds., *Studies in Sardinian Archaeology*, Ann Arbor, 1984, 237. ローマの支配下に入る経緯は栗田伸子、佐藤育子『通商国家カルタゴ』講談社、2009 年。
- 2) Livius, 30. 38. 5; Plinius, *NH*, 18. 66ff; P. Erdkamp, *The Grain Market in the Roman Empire: A Social, Political and Economic Study*, Cambridge, 2005, 153, 209-213.
- 3) Cicero, *Pro. leg. Man.*, 34.
- 4) Caesar, *BC*, 1. 30-31; *RDGA*, 27.
- 5) Valerius Maximus, 9. 7. 2; Plutarchus, *Vit. C. Gracch.*, 2.
- 6) Y. Le Bohec, Sardinia, in Id., ed., *The Encyclopedia of the Roman Army*, Chichester, 2015, 847-848.
- 7) ローマ帝国の諸属州に関する研究は無数にあるが、その大半は属州サルディニアの状況に触れない。
- 8) 以下のフォルドンジアヌスのローマ遺跡についての基本的情報は、P. Meloni, *La Sardegna Romana*, Sassari, 1975.253-255 (以下、Meloni, *Sardegna* と略す); Id., *La Sardegna Romana. I centri abitati*, *ANRW*, II. 11.1, 1988, 533-534 (以下、Meloni, *centri* と略す); Tronchetti, *op. cit.*, 273-276 に、筆者による実地調査の所見を加えたものである。なお、本稿の写真はすべて筆者撮影。
- 9) 図は Tronchetti, *op. cit.*, 236; R. Zacca, tr. by R. Pierce, *The Archaeology of Roman Sardinia*, Sassari, 2016, 12 等に基づき、筆者作成。正確な地図ではなく、大まかな概念図である。
- 10) Meloni, *centri*, 510-512.
- 11) Zacca, *op. cit.*, 95.
- 12) *IL Sard.* 194.
- 13) S. L. Dyson and Rowland, Jr., R. J., Survey and Settlement Reconstruction in West-Central Sardinia, *AJA*, 96, 1992, 207.
- 14) たとえば G. Sotgiu, L' epigrafia latina in Sardegna, *ANRW*, II. 11. 1, 620 (E11), 639 (B130).
- 15) Zacca, *op. cit.*, 95. 「コルシカ人」はコルシカ島住人ではなく、大プリニウスが『博物誌』3. 7 で 18 の oppidum を占めているとする、コルシカ出身の、サルディニア先住民最大の部族を指すと考えられる。
- 16) *IL Sard.* 378.
- 17) ただし、写真の橋は大半が修築されたものであり、ローマ期の部分は少ない。
- 18) Zacca, *op. cit.*, 11-13.
- 19) Dyson and Rowland, *op. cit.*, 208.
- 20) E. Bernardini, *Sardegna antica : Guida archeologica dalla preistoria all'età romana*, 1979, 181; Tronchetti, *op. cit.*, 273.
- 21) *IL Sard.* 188.
- 22) *AE*, 2001, 1112; Zacca, *op. cit.*, 96.
- 23) Dyson and Rowland, *op. cit.*, 208.
- 24) ストラボンは島の都市のうちで、カラリス、スルキスがとくに注目に値するとする。Strabo, *Geographica*, 5. 2. 7.

- 25) Tronchetti, *op. cit.*, 276-281.
- 26) Meloni, *centri*, 532; Tronchetti, *op. cit.*, 276-278. なお、オスティアにはカラリスの船主や商人の組合も事務所を置いた。坂口明「ローマ時代の商業と商人のネットワーク」歴史学研究会編『ネットワークのなかの地中海』青木書店、1999年、50-51頁。
- 27) M. S. Balmuth, *Sardinia in the Mediterranean: A Footprint in the Sea*, Ann Arbor, 1992.
- 28) Diodrus, 4. 30, 5. 15; Strabo, *Geographica*, 5. 2. 7; Pausanias, *Periegetes*, 10. 17.
- 29) Cicero, *Ad Fratr.*, 7. 2. 3; Plutarchus, *Vit. C. Gracch.*, 2; Pausanias, *ibid.*
- 30) M. Goodman, *The Roman World: 44BC-AD180*, London, 1997, 202; R. J. A. Wilson, *Sicily, Sardinia, and Corsica*, *CAH*, X, Cambridge, 2nd ed., 1996, 445-448.
- 31) Erdkamp, *op. cit.*, 225.
- 32) R. J. Rowland, Jr., *Mortality in Roman Sardinia*, *StSar*, 22, 1973, 358-368.
- 33) P. J. Brown, *Malaria in Nuragic, Punic, and Roman Sardinia: Some Hypotheses*, in Balmuth and Rowland, Jr., *op. cit.*, 228-229.
- 34) Meloni, *Sardegna*; Zacca, *op. cit.* 壮麗な公共浴場にも、先住民にローマ支配の力強さを知らしめ、威圧する効果があったろう。
- 35) なお、前述の Goodman は、タキトゥスの記述のニュアンスから、この派遣の目的は厳しい風土で解放奴隷が衰弱死することを狙ったものであり、治安維持は二の次であったとする。だが、隠された意図はともかく、派遣の目的は山賊行為の鎮圧であった。
- 36) サルディニアはネロ帝期、トラヤヌス帝期、マルクス・アウレリウス帝期には、皇帝属州から元老院属州とされた。ただ、これらはサルディニア固有の事情からではなく、他属州の事情と連動してのことであった。結局一時的措置であり、他属州の状況が変化してからはすぐに皇帝属州に戻されており、皇帝側が低くない関心を寄せていたといえる。
- 37) Dyson and Rowland, *op. cit.*, 215-216.